

アップルシード外伝①

オリュンポス・アイ

大武 完

原作：士郎正宗



これは無料の立ち読み版
です。本文264ページ中、
冒頭の28ページだけを
抜粋して掲載しました。

アップルシード外伝①

オリュンポス・アイ

大武 完

原作：土郎正宗

青心社



目次

プロローグ

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

エピローグ

255 205 191 163 113 57 9 5

プロローグ

PROLOGUE

見つめていると怖ささえ感じるほど深い青の空と海。

だからルシアはオアフ島が好きだ。

イオラニ宮殿前ではたくさんの観光客がそぞろ歩き、警察と消防の楽隊が心躍らせるマーチを演奏しながら行進している。

お祭り気分は最高潮だ。

ルシアはその横手を軽やかなランニングで走り抜ける。かたわらをゲンゾーが、時折腕時計に目をやりながら伴走している。

今夜NBCアリーナで行われるキックボクシングの興行ポスターが目に入る。

『第五試合 女子フライ級ノンタイトル戦 チャンピオン VS 期待の新星』

デビュー以来、破竹の勢いで連勝を続けるルシアと、年齢による引退がささやかれているチャンピオン・ヘレンとの一戦だ。ノンタイトル戦とはいえ、ヘレンとは観客の前で拳をあわせられる機会はないだろうと思っただけに、気合いが入る。

少し先に人混みが見える。ゲンゾーが何も言わずに前に出る。ルシアの体は、ゲンゾーの大きな背中にすっぽりと隠れてしまう。そのおかげで通行人を避ける手間もなく、まっすぐに走ることが出来る。

ゲンゾーの歩調に合わせていると、ほどよく筋肉がほぐれ、体が芯からあたたまっていくのがわかる。まるでルシアの脈拍や血流の動きを、すべて把握してくれているかのようだ。

こういう気遣いがなんでもないのでこのように出来るゲンゾーは、やはり優れた武道家なのだろう。この試合のセコンドを断ったのには腹が立つが、幼なじみのよしみというやつだ。こうして計量後のアツプタイムに付き合ってくれるだけでもよしとしよう。

「シフォンは？」

ゲンゾーの背中越しの問いにルシアが答える。

「今頃もうアラモアナよ」

シフォンは昨冬、世界的な女性サーファー国際大会、ロキシ・プロを制した。今日は大観衆の見守る中、エキシビジョンを行う予定だ。

健康的に焼けた褐色の肌ToStraitのブロンド。いつもかわいらしい笑顔を絶やさないシフォンは、ルシアにとっては幼なじみという以上に憧れの同性でもある。

こういうことを女性の友達に言うのと、かならず疑いと妬みの入り混じった反論を聞かされることになる。ルシアの、キックボクシングで鍛えた肉体とキックボクサーにしては大きすぎる胸、やわらかで豊かなブラウンの髪。そして深いグリーンの混ざった大きな黒い瞳に小作りな鼻、なだらかなあごの線。シフォンとはタイプは異なるが、美形と称されるには十分すぎるほど整ったルックスの持ち主だと皆評し

てくれる。それは有り難い。嬉しい。しかしどうしても違和感がある。

専門誌以外でも、ファッション雑誌などのモデル依頼が頻繁ひんぱんに来る。来るには来るが、ルシアはなぜか奇妙な劣等感を感じてすぐに断ってしまう。しょせんは格闘技をしている女の子という物珍しさゆえだと、口には出さないが考えてしまう。いくら周りがルシアの美貌をもちあげてくれても、心のどこかで、ああ、やっぱり女の子というのはシフォンのようでなくっちゃなあ、と思う。それは見栄でも虚飾でもなく、自分ではどうしようもないコンプレックスのひとつだ。

逆にいえば、だからこそルシアは「シフォンのようでない私」として、ハードな格闘技であるキックボクシングに没頭できる。

この多少バイアスのかかった、しかし少女のままのような純粋で強い思い込みを、なぜかゲンゾーはわかってくれている。ルシアとしてはそれだけで十

分だと思つている。

まあそんなことより、今日は全世界的にめでたい日だ。

二十三年前の今日七月七日、国連主催のサミットで「地球復活の日宣言」が採択された。核戦争後の地球が青い空を取り戻したことに對するものだ。その記念すべき日の楽しい盛り上がりには、ルシアのコンディションもいい具合に仕上がつてきていた。

突然、傍らを走つていたゲンゾーが減速し、空中を見上げながらつぶやいた。

「なんだ、あれ？」

いちはやく異変に気づいた幾人かも、同じように空を見ている。

「なによ？」

ルシアは目をこらしてゲンゾーの指し示す方向を見た。遠くに黒い影が見える。それは見る見るうちに大きくなつていき、広場から不安の色の濃いどよめきがあがつた。

青い空を黒い戦闘機の影が覆つていく。

そこから降りてきたのは、武装した空挺部隊だつた。

第1章

CHAPTER 1

銃声が遠くで響いた。ルシアはおかげで悪い夢から目を覚ますことができた。

テントから出て周囲を見渡した。

そこは迷彩塗装と草木で擬装された野营地。かすかに硝煙の臭いがある。そしてそれを見慣れた光景としてとらえているルシア自身。

先ほどの夢は、悪夢ではあっても非現実ではない。あの日から約二年。美しいオアフ島は今や、住民たち同士がゲリラ戦やテロで血を流し合う、泥沼の戦場なのだ。

「おいルシア、おかしいと思わないか？」

突然耳元で声をかけられ、ルシアは驚いて半歩下がった。声の主が聞きなれたゲンゾーのものでなければ、叫び声をあげていたかもしれない。

「銃声のこと？」

ルシアは平静を装ってこたえた。

ゲンゾーは若くして武道家として名をはせていただけあり、練度の低いルシアたち即席ゲリラ兵の中では、隠密接敵などの技術は水際立っている。対してルシアは、アスリートとしての身体能力の高さはあるものの、リングという限定条件の下でしか闘った経験がないため、ゲリラ兵というより、「動きだけはいい民兵」の域を出てはいない。

ゲンゾーは暗視ゴーグルでワイキキ方面を見渡しながらいった。

「さっきから散発的だが、止むことはない。休戦協定を前にして、気に入らない動きだとは思わないか？」

「協定成立前に、最後の悪あがきをしている連中でもないんじゃない？ どうしてそんなことをするのか、私には全然理解できないけど」

「だとしたら、今夜の出勤は避けられそうにない

な

嫌なことをいう、トルシアは思った。しかし、ゲンゾーの言葉はおそらく的をはずしてはいない。たしかにルシアたちペレ同盟は、今夜はまだ枕を高くして眠ることのできる状態にはないのだ。

世界各地で突如起こった武力紛争は各国間の情報網を破壊し、国家間レベルの意思疎通をなきに等しいものとした。やがてそれはすぐに地球規模での混沌とした非核大戦へと発展し、都市は次々と廃墟となり、人々は出口の見えない戦いに、はかない命を散らしていった。

ここオアフ島を含むハワイ諸島はその地政学的重要性から、すぐに北米大陸でにらみ合う「帝国」と「連合」、そして東アジアの「ポセイドン」の三大勢力が要地として奪い合う激戦区となった。そして住民たちもそれぞれの勢力を背景に三派に分裂し、局地戦とテロを繰り返していた。だが第四勢力として生

まれたルシアらペレ同盟は、ハワイ諸島を三大勢力の政治的緩衝地帯とし、中立勢力となって生き延びる道を模索していた。その政治的、軍事的活動がようやく功を奏し、ハワイ諸島内部のゲリラ間での話ではあるが、休戦協定が結ばれようとするところまでにごぎつけた。

その調印式が明日、カメハメハ大王前広場で行われる予定になっているのだ。

油断なく周囲を見渡すゲンゾーの背中を見つめながら、ルシアは大きなため息をついた。

（なぜなんだろう？ もう今夜だけなのに。この夜さえ明ければ、喉から手が出るほど渴望していた和平が成立するというのに）

ルシアは沈鬱な表情で曇天の夜空を見上げた。ルシアをはじめペレ同盟の仲間の兵士たちは、この戦争がなぜ、どうして起こったのかという問いかけをすること自体、とうにやめてしまっていた。ペレ同

盟の首脳たちでさえ、敵勢力の背後にいる大国の思惑を完全に把握しているとは思えない。

ルシアたちはただ、その日その日をいかに生き抜くべきか。それだけにしか興味をもてなくなっていた。

「おい、第四班集体だ。グレッグ隊長が作戦を組むそうだ」

班長の呼びかけに反射的に返答しつつ、思わずルシアは天をあおいだ。

やはり今夜もなのか。

あと少し。夜明けまであと少しだというのに。

駆け足でゲンゾーと集合場所へ向かいながらも、ルシアの胸中にはやりきれない鬱屈がうずまいていった。

もうたくさんなのだ。重い装備も、暗闇で敵襲に怯えることも、震える手でいまだに慣れない銃のグリップを握りしめるのも。

集合場所は廃墟となつたリゾートホテルのパー

ティールーム。わずかに残る以前の華やかな面影がえつて痛々しい。同じ第四班のシフォンはすでに到着していた。シフォンはルシアに目で挨拶をし、ルシアは苦笑でそれに応えた。

一段高い壇上中央の机には地図が広げられており、それを前にして、グレッグがにやり、にやりと音を立ててガムを噛みながら、椅子に座つて兵士たちが集合するのを待っていた。

ルシアはこの中年の、傭兵あがりの指揮官がどうしても好きになれなかつた。もちろん、グレッグがルシアたちを呼び出すということは即ち戦闘にかり出されるということだから、という単純な事実もある。

ただ開戦以来、幾人かの職業軍人やグレッグと同じ傭兵がルシアたちペレ同盟の作戦指揮をとつてきたが、グレッグの指示は彼らのそれと比べ、常にペレ同盟側の大きな犠牲を前提としたものだったのは事実だ。もつともそれが結果的に敵の三勢力に甚大

なダメージを与え続けてきたからこそ、グレッグが単なる一傭兵の立場を脱し、ペレ同盟の首脳の一員に成り上がったのだろうが。

グレッグは自軍の兵を囷おどりに使った作戦を、平然と指示する。もちろん自分が安全圏を出ることは決してない。そしてその強気すぎる作戦を実行するため、兵士に対して頻繁に士気を高めるドラッグのたぐいを使う。さらに、作戦成功後、まるで褒美のように麻薬が与えられる。その飴と鞭にからめとられて、骨抜きになってしまふ者もいるにはいる。

しかしルシアは今まで決してそれらに手をつけずに来た。そしてそれはこれからも変わらないだろう。(あんな奴の手のひらにのせられて思うように使われるなんて、我慢できないもの)

こういうとき、意地っ張りに生まれてきた自分の性格に感謝したくなる。

そしてルシアのように考える者は、決して少数派ではない。あまりに潤沢すぎるドラッグの量に眉を

ひそめ、グレッグのことを戦争に乗じた麻薬商人だと決め付ける者さえいる。

囷おどりとなつて死んだある兵士は、グレッグを嫌つていつもこう悪態をついていた。

俺はアイツのたるんだ頬も、ヤニで真つ茶色に染まった歯も、濁つた白目も、脂ぎつた肌も、いつもだらしなく弛められているベルトの締め方も、左頬をあげながら舌打ちする癖も、痰を吐くときの耳障りな喉の音も、そっくり返つた尊大な態度も、下卑たイントネーションも、もう何もかもが気に入らないんだ、と。

休戦協定を前にした現在、ペレ同盟の兵士たちの間でグレッグに対する悪評・不満・反発は公然と蔓延まんしているといえた。

しかし、たとえどんな人物であれ、自分の上官となつている以上、戦場ではグレッグの命令に従うことがルシアたちの使命である。反抗は許されない。それが戦争というものであり、そしてまだ戦争は終

わつてはいないのだ。

各班、小隊、中隊と順に点呼が集約され、中隊長たちが次々にグレッグの前に進み出て、集合完了の報告をする。グレッグはだぶついた^{まぶた}の奥から抜け目ない眼光を発しつつ、無言でうなずく。そうして少し間をおいてから、おもむろに立ち上がった。

「諸君」

もったいぶった調子でそういったあと、たつぷりと間をとって、集まった兵士たちを睥睨する。そしてこう切り出した。

「周知のように、諸君らの働きのおかげで、あと少して休戦協定が我らペレ同盟の手に入ろうとしている。これ即ち、^{すなわ}名譽の戦死をとげた兵士たちも含め、すべて諸君らの努力の成果である」

芝居がかった、一片の真実味さえ感じさせない口調にルシアは、和平が成れば、一番先にお払い箱になるのはアンタだよ、と心中で毒づく。しかしグレッグはそんな一兵士の思いなど当然酌^くみ取るはずもな

く、演説めいた作戦指令を続ける。

「しかし残念なことに、諸君らの奮闘を嘲笑うかのように、休戦協定に異をとなえる愚か者たちが、不穏な動きを開始したという情報が入ってきた。平和の価値を知らぬ者たちの、まったく理解しがたい行動である。しかし、そういう不逞^{ふてい}の輩を殲滅^{せんめつ}するのが我々の任務であることは、すでに諸君らの知るところである」

やはり来たか。今夜も出動なのか。

集まった兵士たちから、疲弊と落胆の気配が広がった。

が、グレッグは意に介すそぶりさえみせない。

「愚か者は二派ある。ひとつはこのオアフ島で戦闘を開始しようとしているが、この馬鹿者たちは我々が作った囷陣地を浅はかにも取り違え、攻撃、殲滅せんと包圍作戦を行おうとしている。このカスども^{カスども}の虚をついて囷陣地のさらに外延部で包圍し、完膚無きまでに叩きのめすべき役割がひとつ」

ここでグレッグはおほん、とわざとらしい咳払いをして一旦言葉を切り、後ろ手を組みながら、まるで大舞台にあがった役者のように壇上の端から端までを往復してみせた。

そして大げさに片眉を上げながら声を張った。

「しかし真に深刻な問題はもう一方である。休戦反対派は、オアフ島に本拠をおく我々ペレ同盟の軍事的弱点についてマウイ島に集結し、休戦条約の発表と同時に、それを欺瞞ぎまんとする新勢力誕生の声明を企図しているというのだ。もしもそんなことを許せば、我々平和を求める者にとつては、まったくもつて、実に由々しき事態となりかねない」

これにはルシアも驚かされた。休戦反対派がいな
いことはないだろうとは思つてはいたが、まさかその点で一致団結しうる新勢力がこんなに早く誕生するとは。この混沌としたハワイ諸島の現状を考える
と、予想することさえしていなかった出来事だった。

グレッグは沈痛な表情をつくりつついった。

「私も信じたくはない。和平そのものに反対する輩が、このハワイ諸島でそんなに大量に生き延びているということなど。だが、残念ながらこれは極めて確度の高い情報なのである」

兵士たちに動揺が走る。グレッグは自分がその危惧をぬぐい去る救世主であるかのように、いつもはくぐもつた発音を明確にして、厳かに命じた。

「危機である。しかしうるたえる必要はない。我々ペレ同盟首脳の迅速な政治的努力により、マウイ島を拠点とするポセイドン派の部隊とともに、彼らに先んじて緊急の合同軍事作戦を行うことが決定されたからだ。それ故諸君には、これからケア口湾に停泊させてある輸送船に乗り込み、マウイ島のマアラエア湾に向かつてもらう。なにぶん緊急の作戦のため、指揮系統は現地のポセイドン側に一任してある。こちらの部隊編成はすでに伝えてあるので、到着後はポセイドン派の指示に従うように」

自らが行動範囲とする地域の地形・天候その他を

熟知していることは、ゲリラ兵にとつては、他に替えがたい命綱のようなものである。兵士としての訓練は、お世辞にも十分に受けたとはいえないルシアたち即席ゲリラ兵にとつて、自らの庭とも言えるオアフ島を離れることほど危険を感じることはない。

口には出さないが明らかな不安が兵士たちに広がる間に、グレッグはいつものぼそぼそとした口調に戻った。

「それからもう一点の、囿陣地に近づく勢力の殲滅であるが、これは私の第一小隊によつて行うこととする。が、念のため、他の小隊からも支援を仰ぐ。選抜メンバーは各小隊長に指示するので、指名された者は速やかに指令室に集合すること。以上である。各小隊、班は指示に基づき、迅速な行動をとるように」

最後の指示に特段の興味を持った者はいなかった。グレッグ『の』第一小隊というのはつまり、傭兵時代からのグレッグ配下の者たちで、即ち戦争のプ

ロである。グレッグにとつてはまさに虎の子たちであつて、自分の傍らかたわから離し、遠いマウイ島まで派遣するとは考えられなかった。

解散を命じられたルシアたち一般兵士の表情には、通常の戦闘とは比べられないほどの緊張感が浮かんでいた。

休戦協定を生きて迎えられるか否か。

それはこれからの数時間で決まるのだ。

「ここまできて休戦反対だなんて、いったいどういふつもりなのよ。そいつらがどんな顔してそんなこといつているのか、一度おがんでみたいもんだわ」

戦闘準備でざわめく野営地のテントで、ルシアは不安に負けてつい言わずもがなことをぼやいた。

傍らで装備のチェックをしていたゲンゾーとシフォンは、しかしそんなルシアを非難したりはしなかった。

「いや、俺としては顔なんて見られなくても全然か

まわらないな。そんなやつらと知合いになりたいたとは思わないし、それにその分、戦わなくて済む確率が高くなるわけだし」

ゲンゾーのいつもと違ったとぼけた言いように、シフォンは笑って応じた。

「たしかに、私たちにとってベストなのは、休戦反対派の中でクーデターが起こって、無血のまま明日の休戦協定が結ばれることかもしれないわよね」

しかし、そういうながらも、慣れた手つきで残弾数をチェックするシフォンの目つきは鋭い。

シフォンは弾倉をしまい、セーフティのかかった拳銃をテントの壁面に向かって構え、照準を確かめながらいった。

「でも、一度でも顔を合わせてしまったら、不運を嘆くより、倒すべき相手を確実に倒して生き延びましょうね」

ルシアはそんなシフォンを見ながら、この期に及んでまだ不平不満が先に出る自分を恥ずかしく思っ

た。

しかしそれにしても、このシフォンの堂々たる兵士ぶりはどうだ。ルシアは同じ班の人間として頭が下がるばかりである。

持ち前の反射神経のよさと身体能力、飲み込みの早さ。そしてなにより兵士として戦争に赴かなくてはいけないということに対する揺るぎない覚悟。武道家として武器の使用や格闘術全般に対する能力がすでにそなわっていたゲンゾーは別格として、シフォンは小隊、いや中隊内でも、模範とされる優秀な兵士の一人となっていた。

ルシアが多少落ち込みながら装備を進めていると、ゲンゾーが何気なくつぶやいた。

「休戦が成立したら、ニーナと連絡をとってみたいといけないな。今どうしているかぐらいは、西海岸中の親戚をあたればわかるだろうし」

「ニーナって、どのニーナ？」

その名前にピンとこないシフォンがたずねた。

「俺の従姉妹。ルシアが西海岸にステイしたときに世話になった叔母の一人娘で、仲がいい。西海岸に行くときは必ず会いにいったよな？」

「ああ、あの『地球復活の日宣言』のとき、はじめてオアフ島にくるはずだった娘？」

ルシアは先ほどまでの落ち込みを忘れ、

「うん、そう。私のアメリカの親友なの」

といった。そして久しぶりに、ニーナが肩までのブルネットを揺らしながら、楽しげに笑う姿を思い起こした。

この戦争が始まった日、ニーナはルシアの試合を観るために、オアフ島まで飛行機でやってくるはずだった。そうだ、試合前はルシアがニーナに付き合えることができないから、試合後にオアフ島の案内をしてあげるといつていたのだ。

だが、ニーナが乗ってくるはずの便は緊急の故障とかいう名目でオアフ島には着陸せず、かわりにやってきたのは戦闘機。もちろんその後、ニーナと

の連絡は途絶えている。

「平和がきたら、ニーナにオアフ島のいいところを見せてやんなきゃな」

ゲンゾーはそういつてルシアの頭をぼん、と軽く叩き、そのまま装備を担いでテントを出た。

あつげにとられているルシアを、シフォンは意味ありげな視線で見やりながら、

「ゲンゾーでも、たまにはちゃんと女心をくすぐるようなことがいえるのね。ルシア、平和が来た後でも、あの男からは注意をそらしちゃ駄目よ。知らないうちに浮気されていても、あなたのことだから気づかないかもしれないから」

とからかった。

ルシアは真つ赤になりながら、

「私と奴はそんな関係じゃないわよ！」

と言いつ張つたが、シフォンは笑つてルシアを相手にせず、同じく装備をかついで出て行った。

「まったくもう、二人とも戦闘を前にたるんでるん

だから……」

そういつてから、ルシアは二人のおかげで、先ほどまでの自分で自分の手足を重くするような思いから抜け出せていることに気づいた。

そうだ、この戦闘さえ終われば、ここで生き残ることさえ出来れば、ルシアに平和への道が開けるのだ。

(一人で愚痴って悪いことしたわ。つらいのはみんな同じなのに。二人には後でお礼を言っておこう)

ルシアは気を取り直して遅れていた装備を進めた。準備が終わってテントを出ると、すでに人影は少なく、ほとんどの兵士は集合地点に移動したようだ。この最後の作戦の規模の大きさがわかる。急いで追いつこうと歩を速めたところ、ルシアを呼ぶ声がした。

「あなたはマウイ島まで船旅の組？ よかったじゃない、優雅で」

ルシアは聞こえなかったふりをして走り去ってし

まおうかと思った。しかしそういうわけにはいかない。なにせ相手は今でもハワイの女子キックボクシング・チャンピオンなのだから。

「そうです、ヘレンさん。あなたは？」

ヘレンは腰のホルスターに拳銃を携帯してはいたが、いかにも申し訳程度で、お世辞にもこれから戦闘に出ようという態ではない。長い金髪はまとめることさえされていない。しかしヘレンは、
「私は囹の殲滅作戦の方。グレッグが各小隊から何名か選抜するっていったでしょ？ それに選ばれちゃったのよ」

と、あからさまにルシアを見下した口調でそういった。

一方ルシアはやっぱりね、と思っただけである。

あの『地球復活の日』記念日にルシアとノン・タイトル戦をやるはずだったヘレンは、今ではグレッグの『お気に入り』の一人だ。グレッグは用もないのに毎晩夕食にヘレンを呼び、ヘレンは当然のこ

ように指揮官室に入つていき、朝まで出てくることはない。それが日常なのである。

ヘレンは、今夜は作戦に参加することさえせず、グレッジとここで高見の見物を決め込むようだ。一方ルシアはこれから地形も心もとないマウイ島で戦闘を行わなければならぬ。正直なところ、ヘレンの世間話につきあえるほどには気持ちの余裕はない。しかしヘレンはかまわず言葉を続ける。

「夜が明けたら、平和がくるのね。そしたら」

ヘレンは表情を一変させ、ルシアに挑発的なまなざしを投げつけた。

「状況が許せば、あの日ふいになったノン・タイトル戦、やってあげてもいいわよ。もしあなたがその試合で少しでも健闘してくれたら、いつかタイトルに挑戦させてあげてもかまわないわ」

「えっ？」

ヘレンの意外な言葉にルシアは思わず問い返した。すると、ヘレンはルシアをじろりと睨んだ。

「まさかあなたまで私がこの二年間で、キックボクサーとしてはおばあちゃんになつてしまったなんて思っているんじゃないでしょうね？　そう思っているとしたらとんでもない間違いだつてことをわからせてあげるから。まだまだ私はチャンピオンなのよ。それは変わらない。わかるわね、『期待の新星』さん？」

ヘレンはルシアを、あの日の興行の煽り文句のままの名で呼んだ。ルシアの口元が思わずほころんだ。戦争で同じ小隊に配属されてから、ヘレンの気位の高さには辟易させられることしばしばであった。だが、そういう部分を向こう気の強さとして出してくれるなら、それはむしろルシアの好むところなのである。

ルシアはかかとを揃えてヘレンの前に立ち、敬礼をした。

「もちろんです、チャンピオン。そのときはベストマッチをお約束します」

ヘレンはそんなルシアに向かつて、うざったそうに手の甲を振ってみせた。わかつたらさつきと行け、ということだ。

ルシアは苦笑を浮かべつつ、ケア口湾に向かう集合地点まで全速力で駆けていった。

ケア口湾を出発した「輸送船」二隻は、船底の貨物倉に各中隊の兵士たちを満載して、外洋を最大船速で航行していた。

ルシアたちが乗る船の操舵室など要衝は船尾にあり、その前方は低いドーム状の屋根で囲われている。甲板は屋根の縁に沿って、上甲板、第二甲板、第三甲板にわかれて船を取り巻いている。

旧来のスクリー型ではないので、速度は速い。その分荒く高い波の上を蹴立てて進む。揺れは相当なもので、ルシアはすぐに気分が悪くなった。

無言で班長に向かい片手をあげ、第三甲板に出て胃の内容物を出しに行く許可を得る。梯子はしこをあげ、

命綱をセットするのだが、すでに胃腸が暴れ出しているので手つきがもどかしい。海中に出すべきものを出してしまうと、ようやく一息つき、周囲の様子が目に入る。

人がやっと一人通れるほどの狭い甲板は、船底が海面をうつたび、衝撃と荒波に襲われる。こわごと海面をのぞきみていると、大きな波をひとつかぶった。そこでやっと我に返り、命綱をしつかりと握りしめる。こんなところで救命具もなく外海に落ちたら最後、絶対に助からない。

これなら辛気くさい貨物倉の方がましだ。気持ちだけは急ぎつつ、しかし慎重に甲板のへりから貨物倉の梯子へ後ずさりする。ところが、命綱が甲板の突起物にひっかかってとれない。でももう甲板には戻りたくはない。懸命に船の内部からそれをはずそうとするのだが、思うようにいかない。仕方なくもう一度甲板に顔を出したとき、船尾方向の甲板にゲンゾーの姿が見えた。

あれ？ ゲンゾーでも船に酔うようなことがあるんだ。一瞬そう思った。しかし、ゲンゾーはすぐに命綱をベルトからはずし、甲板のフックに結びつけた。そしてまるで当たり前のことのように、そのまま最船尾の操舵室へ向かって船の外壁を登っていくではないか。

ルシアは驚きのあまり声もだせず、ただその姿を見守っていることしかできない。

ゲンゾーは操舵室の窓際にへばりつくと、しばらくその体勢のままじっとしていた。そして目的を達したのだろうか、上下左右に揺れる船の外壁を、ロッククライマーのように器用に降りてきた。そして甲板で命綱をベルトにフックし直したとき、呆然としているルシアと目があつた。ゲンゾーは少し驚いたようだが、鋭い視線をなげかけながら口元に人差し指をあて、ルシアに口外無用のサインを送った。

ゲンゾーが手真似でルシアに先に降りろというので、それに従い再び貨物倉へ降りて座る。そして五

分ほどしてからゲンゾーが降りてきて、船に酔つて足下がおぼつかないふりをしながら、どすん、と音をたててルシアの隣に座った。そしてさも気分が悪そうに立てた膝に額を押しつけて押し黙っている。しかしよく見ると膝の間から下をのぞき込んでおり、床に置いたメモに何かを書き付けている。

ゲンゾーは姿勢を戻して顔をあげると同時に、そのメモをルシアのお尻と床との間にすべりこませた。いつものルシアなら、レディのヒップになにすんよ、と怒るところだが、今はとてもそんな気分にはなれない。不安な気持ちでゲンゾーと同じように、メモを太ももの間からのぞき込んだ。

メモにはこう書いてあつた。一瞬で背筋に寒いものが走った。

『この船、罨の確度高し。トーマス変装して操舵中。シフォン、アリストター、船内調査中。異常があれば躊躇なく救命具をもって海に飛び込むべし（このメ

モは水に浸してから細かく破いとけよ』

ぞつとした。誘拐犯から脅迫文を受け取った被害者はきつとこんな恐怖を味わうのだろう。

トーマス?! ルシアは目を疑った。グレッグお気に入りの第一小队所属で、傭兵あがりの一人だ。しかし今頃はヘレンたちと一緒に、四陣地の掃討とやらを実行しているはずではないのか? しかも変装しているとはどういうことだ?

ゲンゾーは格闘家や軍人など、自分と戦う可能性のある人間のことを覚えるときのことを話してくれたことがある。曰く、顔つきでのそれより、動きのクセと立ち居振る舞いで特徴づけることのほうがずっと比重が大きいと。そしてルシアはそれがホラでも冗談でもないことをよく知っている。だから、オアフ島おんみづりにいるはずのトーマスがこの船に、しかも隠密裏おんみづりに乗り込んでいるということは、まず疑いなことだ。

それと、こういう危機にはなにかと気働きの効くシフォンはともかく、アリストアーが船内を調査しているというのはどういうことだ?

答えは明らかだ。

第六班の班長である彼にゲンゾーが仕事を頼むとすれば、爆発物処理以外にはありえない。

この船に爆弾? 誰が? どうして?

グレッグの作戦が反・休戦協定派に漏れて、先手を打たれたのか? それでトーマスが急遽派兵された?

考えられないことではない。しかし、決して歓迎すべきことではない。

ルシアは先ほどのぞいた外洋の荒れ具合を思い出し、血の気が引いた。

アリストアーがドアを開けて、兵士たちでいっぱいの貨物庫に顔を出した。

「バーンス、ジミー、手を貸してくれ。第一貨物庫の弾薬が荷崩れした。信管を抜いているので爆発の

危険性はないが、マウイに着いたときの作戦行動で足を引つ張りたくない。狭いところでの力仕事になるが頼む」

アリストターと同じ第六班の二名が身体を起こした。ゲンゾーも立ち上がった。

「力仕事なら俺も手伝おうか？ さつき外で吐いてきたもんで、運動がしたいんだ」

貨物庫内から失笑がわいたが、アリストターはむしろ無表情に、

「悪いな、助かる。あと何人かいらないか？」

と呼びかけた。間をおかずルシアはゲンゾーに右手をつかまれ、無理矢理立たされた。

アリストターは、

「ああ、ルシア、悪いな。それじゃあこのメンバーでいこう」

といてゲンゾーたちを先導した。

ルシアはあのメモに書かれたことへの不安で胸が押しつぶされそうになりながらも、素直に後をつい

ていった。

アリストターは第一貨物庫の床面隅に置かれている爆弾を指さした。

「見る。『信管を抜いていると擬装している』爆弾だ」

第四班のゲンゾー、シフォン、ルシア、それに第六班のバーンズとジミー。全員が思わず身を固くする。

その周囲には同じ型の、「信管を抜いた爆弾」が積みまれている。おそらくこれを見つけ出すために一度脇へ寄せられたのだろう。ならば、ゲンゾーやアリストターは、乗船時からここが怪しいと目をつけていたのだろうか？ 今回の作戦を疑ってかかっている人間はもつと沢山いるのだろうか？ だが今がそんなことを問うている場合ではないことくらいは、ルシアにもわかる。

「この裏は船首水槽だな。水がここに入ってきたら

つづきは書籍版でお楽しみ下さい。

電子立ち読み版

アップルシード外伝 ①

オリュンポス・アイ

2010年7月23日 立読版 発行

著 者 大 武 完
原作者 士 郎 正 宗
発行者 青 木 治 道
発行所 株式会社 青 心 社

〒550-0005 大阪市西区西本町 1-13-38

新 興 産 ビ ル 7 2 0

電話 06-6543-2718

FAX 06-6543-2719

振替 00930-7-21375

<http://www.seishinsha-online.co.jp/>

落丁、乱丁本はご面倒ですが小社までご送付ください。送料負担にてお取替えいたします。

© Kan Ootake/Shirow Masamune 2007

ISBN978-4-87892-343-2 C0093

ヴィズ・ゼロ 電子無料立読版
無料

『ヴィズ・ゼロ』は、
全国の書店でお買い求めいただけます。

当社直販を希望の方は下記 url へ

<http://www.seishinsha-online.co.jp>

青心社

非核大戦の動乱はハワイにも及び、味方の裏切りによる殺戮をかうして生き延びたルシア、ゲンゾー、シフォンの三人は、ヒトミに救助されてオリュンボスに入植する。一度は楽園に見えたオリュンボスに疑問を感じ始めるシフォン。ムエタイ選手として再起を目指すルシア。ハワイで仲間を裏切った張本人グレッグを発見するゲンゾー。さまざまな策謀が交錯する中、命を賭けた復讐劇が始まる！

OLYMPUS EYE